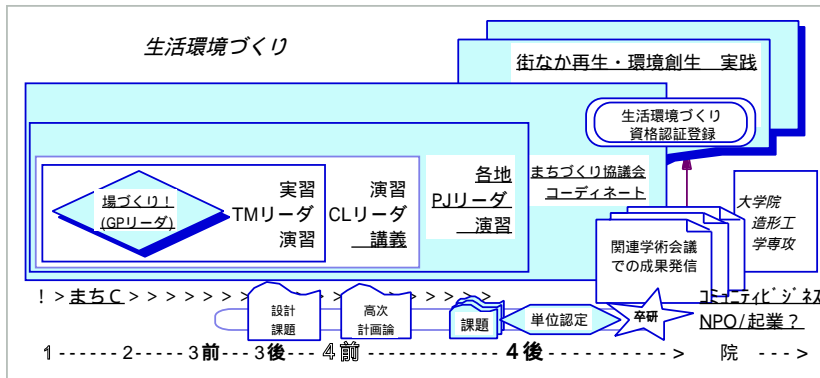


**まちづくり研究**では対象及びテーマそのものが地域や社会との連携を前提にしているので関連NPO法人、各地での協議会主宰などを通じた臨地協働作業（佐々木まちづくり研究室）は臨床研究的となります。実際のフィールドにおける参加者相互の緊張関係の中にこそ、そこには学習と実践の創造的融合が生まれます。

<まちなか生活環境づくりへの関わり からの流れ = 在学中に最大成果を>



**1 自分の切口で元々、夢へ将来へ**

ネットワークに基づく教育研究現場での持続可能な共生環境の実現へ向けた活動であるが故に、独創的な空間環境計画力、構築力の獲得が可能となります。例えば定期開催の産公学連携「生活環境づくり会議」が実践報告、研鑽の場として提供されて活用されています。

実践、実証的な卒業研究関連テーマは多くが建築学会実績になりますし、各種提案型コンペでは創造的なテーマの展開によって実績を勝ち得ています。また、支援創生の造形への学生諸君の積極的な取り組みは建築士資格はもちろん在学中でも生活環境づくり認証資格や福祉住環境コーディネーター資格の取得実績などに当然の如く繋がってきます。研究室では多くの諸君が学部4年で修士実績相当の成果達成しています。

研究室のフィールドを舞台にした近年の(学生諸君の)実績京都に特化した対象フィールドでは進行中の成果のフィードバックが同時に達成できるような可逆的アプローチが展開します。教育、研究、社会活動各側面が三身一体となり複合的、多面的、発見的で



**当然の作法**  
として求められる広義のワークショップ的 ユニバーサルデザインのアプローチ、共生の場づくり、背景に広がる関連領域、組織との「オープンな関係構築」等々...。それらの体験は机上の学習とは全くレベルの違うものとなるはず。そこでさらに自律的な「場づくり」ができるならば、その時には爆発的な臨場感あふれる創発の場面に浴することができよう

**2 テーマが包括的かつ本質的とは?**

課題となるのはより生活実態への注目であり、過程の作業の中で基底となるべき基本テーマの確認とその敷延化の方向性でしょう。領域的な場は「生活」レベルへの着眼という課題を厳しく提起し 理論から手法そして評価まで環境造形全般の流れが顕現する「包括的なフィールド」そのものになります。

**3 これら実践体験こそ創造行為の原点**

まちづくり活動との連携で「各種交流体験」に挑戦しながら「ローカルリイタCR、フェスタ」デザイン、ワークショップ、ファシリテーター、さらにはコーディネートC O 達人へすなわち、生活環境支援をテーマとしての地域における総合的な活動の一貫でありながら上記顕彰以外にも下記のように学生諸君各自の「実践の評価」に繋がる訳です。  
\_05<生活環境づくりマスター21認証>若山、栗林  
\_06<中京助成事業CO>福森  
\_07<コンソ京都助成事業CO>山根、<左京助成事業CO>山元 等  
言ってみれば京都のまちなかでコミュニケーションを培い「起業」に繋がる専門性の獲得も可能な訳です。